

西村 美 東 士

昭和音楽大学短期大学部助教授

先日、授業で「社員の自立を促すために企業全体で取り組むボランティア活動の意義を取り上げた。予想どおり「企業ぐるみ」ということが個人を抑圧するのでは」という反論が多くの学生から出されるなか、一人の学生が次のように書いてきた。

「企業だからできること、サラリーマンは給料でるから。ボランティアは個人的なものではない。ボランティアでは食えない。個人でボランティアをやっているのはバカである。ある程度のゆとりがあつて、やること。これから何かをやるうとしている若者たちにとっては無駄な時間である。自分の欲を満たさずしてどうする。」

よくにはこれが現代人の真実の叫びのように聞こえた。実際このペーパーを他の学生に紹介したところ、「そういう自分を隠さずに書けるなんてすごい」という賞賛の声があつた。ボランティア研修会の若者さえ「真実でさるわけではないけど否定はできない」といった。よくは思った。このペーパーは、上下

希望

いまとは違う何か？

競争のせちがら現代社会に生きる人間が、それでも「希望にあふれた人生でありたい」という願いを捨てられないとき、私はふつうの人とは比べものにならないほどの自分だけの希望をもっている」と思い込もうとしている姿なのではないか。しかも、その自分の「希望」と言うものが、じつはだのないもの、ねだりにすぎないことにも気づかないようにして。そして、よくにも同じ気持ちがあつたら、このペーパーに真実を感じたのではないか。

ところが、タイでの少女買春反対のボランティア活動に楽しく参加している女子高校生が、このペーパーについてあつさりこう言つた。「この人、ボランティアのいい世界を知らないだけじゃない？」。彼女の言葉はもう一つの真実だ。希望は、彼女がいうとおり、自分が見ようとしさえすれば身近にころころとあらわっているものなのかもしれない。「いまとは違う何かがある」と自分に言い聞かせるのはもうやめたいと思つた。

ひろば